

世話・治療・サポート - その新たな展開の可能性 を探る - (公開シンポジウム)

著者(英)	Daishin Hage, Naoko Umehara, Keiko Doi, Sachiko Matsuura
journal or publication title	心の危機と臨床の知
volume	1
page range	137-160
year	2000-07-20
URL	http://doi.org/10.14990/00002443

シンポジウム
『世話・治療・サポート』
その新たな展開の可能性を探る

シンポジスト

梅原直子「心の子育てインターネット関西」代表

土井圭子「生活工房」主宰

松浦幸子「クッキングハウス」主宰

企画および司会・進行……羽下大信

羽下 本日は、『現代人と心のケア』という全6回シリーズの公開講座の最後の回ということで、シンポジウム形式という幾分特別のセッティングをいたしました。本日のテーマは、人を「援助する」場合、どんなことが必要か、どんなことが起こっているかという、いま一番リアルなテーマを、「治療」、「世話」、「サポート」といったキー・ワードを手がかりに、専門家とアマチュアという観点も折り込みながら、現在進行形のところをそれぞれのシンポジストに語っていただき、対人援助者としてさまざまな考えてみたい、また、ご参加の方それぞれに深めていただく機会を提供できたら、というのが今回の企画の主旨です。今日は、それにふさわしい三人の方においで戴きました。それぞれをご紹介する前に、手短かに今回の企画の主旨を申し上げます。地域活動とかコミュニケーション活動という

言い方があります。これに関して、僕はこんなふうに思っています。地域というのは、人が住めばそこに成り立つけれど、コミュニケーションというのは住んでるだけでは成り立たない。例えば、5万人住んでいる大団地には、地域はあるけれど、コミュニケーションは意図的な活動がない限り、存在しない。つまり、コミュニケーションというのは、人が生まれてから死ぬまでの生活にかかわること



しようし、一方、コミュニティ活動では、在宅での「看取り」支援活動や「いのちの電話」などがそれに当たるといふ。

今回お招きした方々は、そこに人が住んでいるということだけではなくて、人が人を世話する、あるいはサポートするという形で、今まさに走っている方々、いままさに「コミュニティ活動」をなさっている方々だと、僕は思っています。そのあたりのそれぞれにリアルなところを話して戴きたいと思っています。ご登場の順に紹介いたします。

最初は梅原直子さんです。彼女にお話し戴くのは、『こころの子育てインターネット・関西』の活動で、僕の理解では、子どもたちが育つためのサポート・グループの活動と言えらると思います。彼女はこのグループの代表をされています。2番目は松浦幸子さんです。彼女は東京・調布市で、在宅で生活している精神障害者が日々暮らしていくことをサポートしている方々です。3番目は土井けい子さんです。土井さんは、関西を主軸に活動している方で、そのひとつは、人間が死を迎えるということ、その人の人生の完成だということ捉え方から、自宅や家庭での「看取り」をサポートする活動をされています。

このお三方による、子ども・精神障害者・老年期という3つの入り口から、それぞれの活動を紹介いただくつもりです。それでは梅原さんお願いします。

原梅 こんにちは、梅原です。私自身は4人の子どもを母でして、特に専門職についたこともなく、専業主婦でやってきました。で、ひょんなことから、今回お話しする活動に関わることになり

ました。『こころの子育てインターネット・関西』と言っているこの活動は、もともと、精神科の医師で、会の事務局長の原田正文さんの呼びかけで始まったものです。彼が、これまでに次々おこっている子ども問題にかかわって来て、たとえば思春期の不登校や摂食障害の子どもたちを、いくら専門家個人の努力で「治療」していても、そこには限界がある。思春期だけにかかわるのではなく、もっと早期の乳幼児期をなんとかしないと、思春期にはいつてから現れたところだけを何とかしようとしても、はつきり限界があると感じ、かなり絶望的な思いをもつてらっしゃった。

そんな折りに彼が出会ったのが、大阪・貝塚の子育てネットワークの会で、また、彦根にもグループで子育てをしているお母さんたちがいらして、彼女たちとの出会いの中でグループでの子育てこそが、今の子育てのしんどさをなんとかできるのではないかという希望をもって立ち上げたのが、この会です。1995年の12月にできましたので、4年程になります。その紹介をさせていただきます。

先程の「貝塚・子育てネットワークの会」ですが、もともと11年程前から公民館の支援を受けながら、子育てサークルのネットワークを作って交流がなされていきました。乳幼児期の子育てだけではなく、幼稚園・小学校・中高生までの子育ての中で、親同士あるいは周辺団体と関わりながらのネットワークを持っていきます。貝塚市の公民館は、普通の公民館と違って、主体的に動ける市民をつくらうという一定の哲学をもっているところで、イヴェントなどを次々と打つのですが、それは手段で

あつて、どうやって考える市民をつくっていくかに主眼を置いていたように思います。そんななかで、私たちは、最初はばらばらにあったひとりひとりの母親を子育てネットワークの会としてつなぎ、それをさらに公民館が後押しするという形でやって来ました。今は、親同士が主体的に講座やレクリエーションの企画運営しています。公民館はそれらの活動の財政的な援助やアドバイスすることに徹していて、今では、私たちも独立した団体として、「子育てネットワークの会」としてやっていきます。

子育てサークルというのは聞いたことがない方もいらっしゃると思いますが、今、全国に広がっているようです。関西の2府4県だけなんですけど、2年前に私たちが調査したときには、約800の子育てサークルがありました。いまはその何倍もあると思います。たとえば、貝塚市では100ほどのサークルがあると聞いています。ここ数年で、それは急激に増えてきました。私が11年前に貝塚市でサークルを始めたときには、他にはありませんでした。ここ数年の動きでいいますと、保健所とか公民館とか行政が主になって講座とか教室を開催して、そこから子育てサークルができてきたところもありますし、母親が自発的に作ったものもあります。この急激な子育てサークルの増加は、今の子育てのしんどさをよく現していると思います。

私も20年以上子育てをしていますけれど、目下子育て中のかたがたは、私たちの時代とはまた違ったしんどさを感じていらつしやるようです。そういう子育てのしんどさからの自衛の手段として、なんとかして自分たちで仲間と一緒に楽しい子育て

をしよつよ、ということでも、サークルが自発的に生まれてきています。

お母さんたちは、これまでずっと男女が同時に教育をうけてきて、鎗を削ってやってきているんな能力をもっていて、バリバリやって来た。その方たちが、子どもが生まれたことで、家にはいらざるをえない。自分の能力を發揮できる場所がないという状態で、悶々とし始める。そんな中、こうしたサークルや地域の活動が、彼女たちの「自分は子育てだけをしていいのだろっか」といった不安や不満、また子育てのしんどさを解放する手助けになり、あるいは、彼女たちの自己実現の場になっているらしい。それゆえの拡大・増加なのではないか。最近そう思うようになりました。子育てだけではない、何かをしたい。自分が認められた。社会と何らかのつながりを持っているたい。そういう気持ちで、子育て真つ最中の彼女たちの中にすごくあるように思います。

さて、いまサークル自体がだんだんと広がっていくなかで、問題点が出てきているのも確かなんです。「今、子育て中」っていうお母さんが何人かいらつしやって、その方たちが活発に動いているときはうまく回るんです。が、「子どもが幼稚園に入ったから抜けます」といって、彼女たちが抜けると、次のリーダーが育つていけないとか、サークルやスタッフの方が一生懸命やっていても、メンバーの人がお客さん状態である、というのもあります。今、乳幼時期のしつけを飛ばして、教育の部分が低年齢化してきて、いろんなことを早くに教えようという動きが強まっています。子育てサークルの中にもそれが現れて

いて、就園前の子どもものサークルにもかかわらず、次々といろんなことを教えようとする。子育てサークルのはずなのに、お遊びやお歌や工作なんかを教える。0歳や1歳や2歳の子に、はさみがちゃんと持てるわけがないのに、何か作らせよう、何かさせようという、幼児教室に近いサークルになりつつあるところも出て来た。

形式としては、そのサークルの中にプログラムを考える人がいて、それが順番で回ってくるというふうになっているところが多いんですが、例えばまわりの人がやった時よりも、自分がやった時のほうがウケルことを狙い始め、せっかく共同で子育てをしようとしているのに、競争になってしまふ。子どもに関しても、1歳半の子どもたちがこういうふうになくなっていくんだなというのではなくて、あそこの子はできているのに、うちの子はまだできないというふうな、子ども同士も親同士も競争してしまふ、そんな子育てサークルになってしまふといった問題点も、浮かび上がってきました。

サークルがどんどんできて、数が増えればいいというのではなく、それぞれの質を高める時が来ているんじゃないかと思えます。そういった点からも色々論議していく必要があると思えます。

私たちがやって来たのはわずか4年なんですけど、今日資料をお配りしている中に、これまでの講座の具体的な内容に乗せています。それらの活動から、『インターネット・関西』の役割はなんだろうと考えた時に、ひとつは「子育て支援」ではないかと思っています。この言葉は、最近ではいろいろなところ

使われ始めていて、厚生省のプランでは、保育所とか保健所でも使われ始めています。文部省も、各教育委員会に「子育て支援」を言ってきています。これは、一つには少子化対策でもあるようです。一方、現場の先生たち、保育士・保健婦さんにしてみれば、「子育て支援」といわれても、何を、どう支援していったらいいのか、お母さんたちは今どんなことに支援を求めているのかをつかめないまま、見切り発車しているところがあります。

子育て支援センターという名前を掲げたり、園庭を解放しているという幼稚園もあります。でも、保育所の保母・保父さんが子どもたちを見てくれるかたわらで、お母さんたちはおしゃべりに興ずるといった状態とか、「今度、子どもたちの発表会をするので見に来て下さい」と案内すると、お母さんたちは発表会を見に行ってもしょうがない、それなら園庭をサークルに貸してもらった方がいい、といった、ミスマッチが繰り返されています。こうした事態に対して、今私たちは、専門家の人たちがどんな支援して行けばいいのかを学習する場、援助の専門家のための講座も作るようとしています。

お手元の資料に、ネットワーカー養成講座という記載があるかと思えます。これはすごく人気があって、大阪市内で講座を開いているんですが、子どもの手をひいて2時間3時間かけているんな地域から来られます。どういう方がこられるかといいますと、サークルとかネットワークを作っていらないから、すけれど、本当にこれでいいんだろうかとか、実際やってみてもうまくいかない、と悩んでいらっしやる方もおられますし、

あるいは、何かを始めたい、サークルを作りたいという方、何か地域で活動したい、支援をしたいと思っっている方も参加されます。

「つした講座は、暇だから来れるわけではありません。赤ちゃんをおんぶして来られる方もいます。講座は保育つきでやっていますので、お母さんたちが講座をうけているあいだ、赤ちゃんは保育室でお世話をします。そのための保育士さんがいます。子育て中の方も、本当に何かを求めてこられます。その中で、最初は『インターネット・関西』をお手伝いしたいと言って来られてる方が多かったですけれど、最近増えてるのは、自分の住んでる地域で何かしたい、全然知らないところについて、ボランティアをするのではなく、自分の住んでる地域を住み良くしたい、という方がこられることが多くなりました。

私たち『インターネット関西』としては、サークルを支援するといつても、毎回出向いていつて、一緒に遊びをするとか、相談にのるのは困難です。したがって、どちらかというて、今その地域で活動しようとしている人を私たちが支援するのがいだらうと考え、さまざまに試みています。これは、靴の上から足を掻くような、頼りない感じをしるぎつつ、つした間接的な支援が今の私たちの役割なんだと感じているからです。

それについては、例えばこんなことがあります。先程紹介の目塚のサークルは11年の実績があります。そこでの実践の良質の部分をはかの場所に持って行って、同じことをしようとしたことがあります。これは、うまくいかなかったんです。やはりその地域の実情にあつた形で、地域の人たちが自分自身の地域

をなんとかしようとして動かないことには、本物になっていかない。そんな経験をしました。私たちは、活動してみたいという熱い思いを持っている人たちの学習の手助けをしたりとか、彼らの活動が「これでいいんじゃないの」と確認をしたりとか、あるいは、「ここでこういうことをしようまくいったよ」という情報を提供するとか、私たちの活動だと考えるようになりまして。

私自身が住む箕面市では、講座にいられていた市民の方ともうひとりの専門職の方が知り合いになって、一緒になにかしようとか話かまとまり、新たな活動を始められたということがあります。こうして、講座という場が人との出会いの場にもなっています。そういう形の支援をすることが私たちの会の、とりあえずの目的です。ただ、先程もいきましたように、子育て支援センターで言えば、支援が欲しい側とそれをする側のミスマッチという問題がいろいろと出ていて、私たちも子育て支援のありかたをきちんと考えていかないといけないなあと思っています。

今日の資料にも乗せましたが、「親を子育ての運転席に乗せる」、つまり、子育てをする主体は親なんだといつことを、私たちの子育て支援の基本にしています。親のかわりに、つい、手を出したくなる。けれど、親のかわりをしたのでは、いつまでたつても、親が親になっていかないんです。したがって、どんなに未熟で初心者のように見えても、やはり親がいつも運転席に座っている状態を作っていく必要がある、というのが支援者の基本的な考え方だと思います。

そうすることをしておして、子どもだけでなく、大人も成長していくという視点が、支援する側に認識される必要があると思います。若いお母さんをみていると、「いまの若いお母さんは……」と言いたくなりますが、彼らが「未熟」と見える行動をとるのにもそれなりの時代背景・社会背景があるはずで、彼らは今から育っていく人たちなんだという認識を持ってみていると、今の若いひとたちは本当にすごい力を持っているな、と驚かされることがあります。会報作りなどはとても上手ですよ。イラストを描いたり、文章を書いたり、機械の操作に優れている、私たちにはとても触れられない機械でもすごく堪能に覚えたり。それから、行動力があって、何か一つきつかけがあると、パワーを発揮できるなと思います。だから、支援する側はできる人ができない人を支援するのではなくて、成長する途上の人を支援するという見方がいるかなと思います。

支援のもつひとつの面は、コーディネートする、ということだと思います。支援する側はどうしても全部支援したがるんですよ。でも、支援する側にも力量が必要なようでした。一応ここまではできるけど、これ以上はしないで任せる、といった判断が求められるんです。『インターネット・関西』としてできることは、ほんとうはそんなに沢山いるわけではなくて、それよりもむしろあそこここういう人がいるから会ってみたらとか、この人と一度交流してみたら、といった形で、コーディネートしていく役割を取ろうとしています。これはいわば納豆のねばりだと思っっているんですけど、そういう繋ぐ役割というのを、私たちの会は持っているんじゃないかと思えます。

目塚の話に戻りますと、目塚では乳幼児から思春期までの子どもを持つ親の会がいくつあって、そこで聞いた話ですが、中学の授業で生徒たちが赤ちゃん世話話をその母親と一緒にしたんです。中学生が乳幼児に接する機会は、今ほとんどない。それは作っていかないと、ないんですよ。そういう場を作っていくと、中学生も、小さい子どもと遊び世話するようになる。逆に、乳幼児しか知らないお母さんにとっては、中学生になるとこんなふうになるんだ、といったことをリアルに知ったりできる。また、同じ地域のなかに住んですと、道で出会った時に『こんにちは』って声をかけられる関係もできてきます。

今、中学生はいろんな問題があって大変な時期なんだけれども、この時期の子どもたちに、先生や親だけでなく、地域の大人もなにかしらの暖かい目を向けていくことで、地域ぐるみでの子育てをしていく必要があるかなと思います。また子どもだけではなくて、今から自分たちが今度親の介護などの問題にぶつかったときに、一緒に仲間を作っていく。そのことが一つの町を作っていく。私たちの一つ一つの力は小さいけれど、何か仲間と一緒に町をつくっていく、そんな町になればいいんじゃないかなと思って活動しています。以上です。

羽下 ありがとうございます。少し感想と、それから質問をしてみます。年齢が違う子どもたちがまじるといっつのは、特に年代の低いお子さんたち、学齢前またはそれを少し越したくらいのお子さんたちの中で異年齢の集団ができたときの魅力は、どのあたりにありそうですか？ 実感的に感じておられると

ころを少し追加的に言ってくたさいますが。

梅原 そうですね。たとえば、「プレイパーク」という遊び場を作ってやっています。その遊び場に、中高校生に来てもらったり、あるいは、こういう講座を開いた時に、第2や第4土曜なら、中学生の彼らにも保育をしてもらうんですね。そうするとおじさんやおばさんなんかより、中高生の方がよっぽど人気が高いんです。本気になって遊んでくれますので、小さい子どもたちは、力いっぱい遊んで、エネルギーを発散できる。大人だったら、どつしても「これはいけない」とか、禁止や限界をつくってしまうけれど、子ども同士だと同じ立場で遊んでくれる。そこが他にはない、大きな魅力ですね。

羽下 そこには、例えば梅原さんのお子さんたちがはいることもあるんでしょうか？はいる側の中学生たちに取っての魅力というのは、どのへんにあるんでしょうかね？

梅原 そうですね、ふつうはスタッフの子どもたちにははいるんじゃないですね。思春期ですから、親のしているところにはついていけないんです。だから、よその子がくるんですが、やっぱりそういう小さい子をさわったことがない子がかなり多いんです。でも、今の中学生は学校の中ですごく神経を尖らせている部分があって、それが子どもたちと遊ぶことによって、彼ら中学生の心がすごく柔らかくなる。ところがあると思います。

土井 なるほど。ありがとございました。では引き続き、松浦さん、お願いします。

松浦 みなさん、こんにちは。今日は朝早く東京からでてまいりました。神戸は初めてですが、みなさんにお会いできてうれいす。私は東京でこころ病む人たちと一緒に町のなかで共に暮らしていききたいという実践活動をしていて、今年で12年目になったところです。今どんな活動をしているかというところでは自然食のレストランをやっています。一緒に町の中で暮らしていくときに、障碍をもつ人にとつても、あるいは障碍はないけれども共に暮らしていきたいという市民の人たちにとつても、食事こそが共通な文化かなと思ひまして、食事作りのレストランをやっています。正式な名前は『クッキングハウス』というレストランなんですけれども、『不思議なレストラン』と呼ばれております。活動を紹介するという意味で、その不思議さの魅力をつつばかりお話ししたいと思います。

まず一つは、「何て店員が多いレストランなんだろう」と、来られるお客さんが驚かれます。店員として働いている人もいるし、寝っころがっている人もいるし、おしゃべりしている人もいるし、ご飯を食べてすーっとゆっくり座っている人もいる。みんなつらいんだって泣いてる人もいるし、本当に様々で、店員なかなって思うような人たちがたくさんいます。お客さんが入ってきますと、5人くらいの店員が「玄米にしますか、胚芽米にしますか」とて声をかけてきて、あつたかいお茶を運んでくれたりするよつな店で、初めて入つたお客さんは、

こんなに店員さんが多くてやっていけるのかしら、って心配して下さる、という場所なんです。なぜこんなに店員が多いかといえますと、それは、20歳から65歳までの、こころの病気をしている、現在も医者にもかかって、再発しないために薬も飲んでいられる人たち、彼ら暖かい人間関係のなかで元気に暮らしていきたいという人たちが、店員として通ってらっしゃるんです。

私たちは彼らのことをメンバーと呼んでいるんですが、こころの病気を体験された方たちが、自分にとって本当に大切な居場所として、あるいはもう少し積極的に社会参加するための、働く練習をする場として、あるいは再発を防止するために、とにかく自分がもちこたえられる場所になりたいという生活支援の場として、あるいは今までの人生の中で「くたくさん傷つけられてきたなかで、今のままのあなたで大好きなんだよ、ってことを何回も言うってほしい、いつでも確信したい、そして自分が確認する、こころのケアの場として利用してらっしゃいます。

だから大勢なんですわね。しかも、私たちのその店員さんは『超フレックスタイム』って私は呼んでいるんですけども、何時に来てもいいし、どんなふうに通ってほしい、そして何時に帰ってほしいことになっているんですわね。そして約束事がありまして、禁煙レストランですから、中でたばこを吸わないことと、ご飯を食べたら500円を払うということ（お客様は1000円なんです）、それから、レストランですから、持ち込んできたもの、例えばマクドナルドのハンバーガーとかを食べないという、この3つです。あとは自分のペースでいき

ましようということで、一人一人の方が、最初は本当につらい表情で、もう肩間にしわをよせて、ずっと下を向いたままでいた人たちが、だんだん表情が柔らかくなって、気がつくとお客さまにいろいろ話しかけたり、あるいはお茶を運んだり、『今日は天気がいいですね』という話を自然にしているという変化がでてくる。そういう場所になっています。

私たちのところでは、彼らは店員なんですけれども、参加することを第一に考え、どんな状態でもいいから、とにかくクッキングハウスに行こうと思って支度をして出かけて来てくれたことを大事にして、『歓迎しています』、ということを全身で表現する場になっています。

不思議なレストランねといわれる2番目の理由は、こんな「こちゃこちゃしたなかで、作っている料理がたいへん美味しいんですわ。玄米食で、なるべく自然な素材で私たちの手をかけて手づくりしたものを出しましょう」ということでやっています。市民の方々も大変喜んで食べて下さっています。一日50食から70食ぐらいのランチがでたり、あるいはお弁当の配達をしたりしています。私は今朝はお弁当作りができなかったのですが、大きな運動会がありまして、そこからの注文で147食をスタッフたちが一生懸命つくっております。

市民の方たちが美味しいという食事を、私たちのレストランと一緒に食べて頂きながら、こころの病気をしたひとたちと自然につきあつてくださるという場になっています。本物の味を味わってほしいということで、一生懸命、作っています。例えば明日はコロケにしましょうということで、前の日から玉ね

ぎをみじん切りにして、炒めたりしてやっております。春巻、ギョウザと、全部手づくりするんです。

このあいだ、みんなで旅行に行きまして、そしたらロールキャベツがみんな同じかたちで出てきまして、メンバーたちが大変びっくりして『松浦さん、みんな同じ形のロールキャベツですよ』っていうんです。なぜかっていうと、私たちはみんなで作るものだから、いろんな形のロールキャベツや春巻があつて、それで当然と思つてきたので、違つところに食事に行くところとしてみんな同じ形につくるんだらうかと、びっくりするんですね。こころ病む人びとが、市民の皆さんに美味しいご飯を食べてほしいと思ひながら作つている料理を食へに来てくださつて、そして自然に交流する場所になつていゝるんですね。

3番目の理由なんです、これがまた他のレストランにはないところと思つんですが、カウンセリングつきレストランなんです。お客さまが、人生の途中で色々つらいことがあつて、自分のなかの感情として留めて置くだけではすまされなくなり、すこし聞いてほしい、あるいは助けてほしいという気持ちになつて、全国各地からいらつしやるんですね。そして、お店にはいつて座つた途端に、なんかもうほつとほつと涙ぐまれ、そして「飯をたべて色々話しをされるんです。

私もお客さまの顔をみてるとうわかりますので、近寄つていつて、挨拶をして、いろいろなお話しを伺うこともあります。例えば、若いお嫁さんが地方からいらして、自分の夫がうつ状態のまま自殺してしまつて、そのことをまわりのお姑さんとか親戚のかたに『嫁としてあなたの落ち度でこんなことになつた』

と責められる。私も悪かつたんじゃないかつて自分を責めるつえに、まわりからも責められて、本当に生きているのもつらい状態になつてしまつて、どうしようと思つている時に、その方はこのレストランの記事を読んで、とにかく行つてみようと思つて訪ねてくださつたんですね。

そのことをずつとお話しされていたときに、メンバーの50代の女性のかたがタオルと新しい石けんを持ってきて、『どうぞ』と差し出したんですね。その方は『ありがとつ』と言つて、石けんを顔を洗いタオルで拭いて、『本当にきてよかつたです』といつて帰られたんですね。

そういう接待つて、普通のレストランではなかなかできないと思つんです。それはこころの病気をした人たちが店員さんとしていづばいい、そういうつらい状況が理屈抜きにわかるから、できる接待なのかなあと思つています。そんなところでカウンセリングつきレストランは大繁盛です。今、レストランの収入が彼らの給料になつて、皆さんがなんとかその給料と障害者年金でくらしをたてていくところまで来ました。

私がこんな場を作ろうとしたきっかけは、30代になつて、自分の生き方をもう少し見直してみたい、もつとすこし自分に正直に生きていきたいなあと思ひ、社会福祉の学校にはいり直し、その時に初めて精神科の病院の実習に行つたときです。私はそこで初めて、こころの病氣になつたというだけで、病院のなかで10年とか20年とか、あるいは長い人では30年暮らしている方がいるという現実に出会ひまして、日本の精神科医療と福祉の貧しさに衝撃を受けたんです。そのときに、こころの病氣をし

てもしなくても同じ人間なんだから、この町で一緒にお互いに人間らしく暮らしていきたいなあと素朴に思ったんです。その素朴な思いをどんな形で実現できるのかと捜しているうちに、現在の活動にたどり着いたわけです。

私が衝撃を受けたその年、全国に35万人という方々が精神科の病院に入院したまま、離婚になってしまったり、職場をやめさせられてしまったりして、病院は暮らすところではないはずなのに、暮らさざるを得ない状態でした。日本はずいぶん経済成長を遂げましたけれど、人のこころ、人権を大事にしてこなかったんだなあということに気がついたんです。残念なことに、その数字が18年たった現在でもあんまり減ってないんです。今現在でも33万程の方が、病院に入院したままで暮らしておられます。そしてそのなかの半分から三分の一の方は、私たちのやっつるような場があれば、すぐにも退院できる人たちだとわかっています。彼らをサポートする場がないから、退院できないで病院のなかにいる人たちのことを社会的入院といっています。こんなに豊かになった日本のなかで、まだまだこんな事態が続いているのが現実なんですね。

昨日、日本の精神障害者のリハビリテーション学会というのがあります、私は「町の中にこころ病む人たちが作る文化を」ということで報告をしたんです。まだまだそついう取り組みをしているところが少なくって、本当に興味と関心をもって聞いて戴きました。その分科会のあと、アメリカのサンフランシスコからいらした方が講演をされ、彼ら精神障害者が病院に入院しているとお金もかかるし、社会復帰も遅れてしまふ、地域の

中で暮らしてもらったほうが、お金もかからないし、社会復帰も早くできるという考え方から、入院できるベッド数はすくなく少ないことを報告されていました。例えば、サンフランシスコの人口が70万で、その中で約400人しか入院していらつしやらないんですね。ところが、私が住んでいる調布市は約19万の人口で、そこに3つの精神科の病院があつて、何と800人以上が入院してらつしやるんです。しかもその中には30年以上も入院してらつしやる方もいらつしやるんですね。ベッド数の比較だけから見ても、本当に日本はまだまだ、こころを大切にすることが遅れているのかなと思います。

でも、全国各地に、こころの問題を何とか考えていこうという草の根運動もあります。私の場合、こころ病む人たちと一緒に町の中で暮らしていくためには、何をしていったらいいんだろうと思つた時に、誰にとつてもやさしくなれる、誰にとつてもわかりやすく、誰にとつても喜ばれて、誰にとつてもすぐに「わかった」と納得してもらえような、そついうこころやさしい文化を、こころある人たちの側から表現して行きながら、創り出して行くのがいいのかな、と考えています。そこに市民の方たちが自然に付き合ってもらえたらいいのかなと、そのためには何をしたらいいんだろうと思つたときに、一番最初に浮かんだのが食事作りだったんですね。なぜかといいますが、『食は文化』なんて言いますけども、食事を一緒に食べるといふことはとても気持ちのいいコミュニケーションができる場になるし、食事作りをしているから一緒に付き合ってくれませんか、って市民の方に言うと、すくくわかりやすいから、入って

もらいやすい。

当時の精神科に入院している患者さんたちは、入院と退院があまりにも早く、回転ドアといわれてたんです。退院したといっても、ひとりではかほか弁当とか買って食べてるとさみしくなって、不調になり、幻聴が起きたりして、すぐ入院してしまふ。出ていったら、入ってくる、まるでホテルの回転ドアみたいと言われてたんです。その方たちが再発しないために、やっぱりひとりじゃなくて一緒に食事を食べましようよ、それには食事作りがいいなということをお願いしました。そして、当時調布の町はまだ何もなかったんですけども、もう一人の精神科のワーカーと一緒に、狭い12畳のワンルームを借りまして、そこを居場所にして、食事を作って、孤立して暮らさないように応援しましょう、ということを始めましたね。

当時、本当に今思えば何も考えずにやったと思っただけで、私ともう一人のワーカーとで一人50万ずつ出しあひまして、12畳のワンルーム、半年くらいは家賃払っていきけるでしょう、という感じで始めたんです。というのは、あんまり考えていたらできないんです。考えれば考えるほど深刻な問題ですから、あんまり考えたらできないということがありまして、考える前に始めたんです。ところが一緒に食事を作って食べようねという場所を開いたら、そこに来る人の顔が、いつもの病院での今までの顔と、『えっ！同じ人なのかしら』って言うくらい、全然表情が変わってきたんです。私が病院で接している時はいつも同じようなジャージを着て、肩間にしわをよせて、ジューとつつむいている人が、クッキングハウスに来るときは口紅を

つけてバツクを持って、ちゃんとしたブラウスを着て、いそいそとやってきて、ドアを開けた時に何とも言えない素敵な笑顔をしてくれるんですね。私はもう、それがうれしくて、その彼女の笑顔がもつといっぱい広がるかと思ひまして、やってきました。

病院の中と、外に出て地域で過ごすときのあまりの表情の違いは、私にとつての大発見でした。これは、もしかしたら病院にいるときは、病気であるという演技をしなくちゃいけないのかも知れない、病院にいれば『具合はどうですか』とか訊かれますよね。『イライラします』とか答えると、『もう少し薬を考えますか』と言われるちゃうんです。病気の面からしか考えてくれない。でも地域にいる私たちが接する時は、その人の本当に健康な面とが、人間らしい面とが、たくさん夢をもっている面とが、そのへんでいっぱい付き合いたいと思ひつし、そこをいっぱい引き出したいと思ひつて見えていますから、自然に視点が変わります。それによって、一人の人間が持っている素晴らしいものがいっぱい引き出されるんだということがわかって、私はもう本当に大発見をして、地域に場所を開いてよかったなと思ひつて、やり続けてきたんです。

そうやって続けているうちに、今まで自分は大めなんだ、病気をして家族からも、まわりの人からも否定され、みんなと同じことができない、本当に自分は大めなんだと思ひつていた人たちが、今のままの自分を受け止めてくれる人がいるということから、やっと安心して、少しずつ自分らしさを取り戻して行くんです。そのプロセスにずっと付き合えてくれたから、私自身

もすごく幸せだったなと思っていきます。彼らの、そんな自分らしさを取り戻すプロセスと一緒に付き合いながら、じゃあもう少し積極的に社会参加しましょうかということ、そのための居場所をひらいてから5年目に、一番最初にお話ししましたようなレストランを開くことになったんですね。

そうしましたら、メンバーたちがまた、かなり自信を持ってくるんですね。レストランなんだから少しきれいにしましょうとか、レストランなんだから挨拶もしましょうと、だんだん気運がでてきて、自分たちが一生懸命作った料理が市民の方たちが喜んで食べて下さるといことで、今までこのころの病気をした人たちは、ただ医療や福祉を受けるだけ、受け入れることではなく生きられないと思っていた人たちが、自分たちにも素敵なサービスができるんだとわかって、本当に自信を回復していったんです。そのあたりを本当は詳しくお話ししたいんですが、時間のよつなので、このくらいにしておきます。

羽下 ありがとうございます。少し感想と、それから質問させていただきます。今のお話の中で、これはとても大事ななと思ったことは、その人が自分らしい、いろんなものを取り戻すための活動の中には、「人の世話をする」ということが、その人を回復させていく強い力になるといことがありました。震災の時の神戸でもそうだったんですが、『もっと被災者らしくして』と言っ言い方に対して、『私は私や』とう会話がありました。ずっつと被災者らしくするのがつらくて逃げ出してしまっつこともありましたよね。

松浦さんは、このレストランを開かれることで、人を世話するのを経験することが人を蘇らせるという新鮮な体験をされた。そのときに、ただ世話する人は世話するだけになりやすいですよ。だから、そこがうまくまわるには、彼ら店員さんとして働く精神障害者の人たちが互いに世話しやすいようにする役割を取る、「もうひとりの人」が、たぶんいらっしやるのでしょう。例えば明日は70食いるけど、人は3人しかいないというときに、それをしのぐための最後のストッパーになる人はどんなふうに確保していらっしやるのでしょうか、彼らの役割などについて何かお気づきになること、あるいは、ここが肝腎なところ、というようなことがあれば少しお話し戴けたらと思うんですが、さあ、困った、どうしよう。といった場合のお助けマンのような方のことなんですが…。

松浦 いい質問を戴きました。実際、毎日がそうしたドラマの連続なんですね。例えば自閉的な傾向のある青年だと、例えばかぼちゃとかごぼつとかを、全部自分の好きなみじん切りにしちゃうんですね。きんぴらにしようと思ったのに、全部ごぼつがみじん切りになったりするんです。それをうまくまとめるのが、スタッフの役割なんですね。その人が切ってくれたそのことを大切にしながら、仕込みの時間は9時から11時までの2時間ですから、この時間内でこれをどうにかしようかということ、それでどうにかしてまとめていくんです。

「もしかすると、自分はまわりから否定されるかもしれない」といつも不安と不信感を持ちながら生きているメンバーたち

に、私たちは絶対的な支持と、絶対的な肯定感を与えながら、同時に、開店した時はお客さんに出してもいいような料理を作ってくつなければならぬので、そのへんは本当にスタッフの支える力量が試されることになります。だから、私たちは毎日試されながらやっていることになりました。例えば、酢のものにしようと思っけきゅうりを薄く切っていると、一人のメンバーが少し意欲がでてきて、私に『きゅうり切ってみたいです』っていつてくれますよね。そうすると彼女にきゅうりの切り方を教えますね。教えてやってもらって、うまくできたらほめて、ということをやりがらやっていくんですけど、本当はもう開店の時間だから、自分で切ったほうが早いんだけど、ということがありますよね。だけどそこは彼女がきゅうりを切るって思った気持ちが大変ですから、そういう意味では支える側が自分の役割をこなせるよう、常に自己鍛錬していなければならぬということがもしもせね。

羽下 なるほど、支える側の日々の格闘が目に見えがぶようです。支える側の日々の大変さ、それを乗り越えつつ、とにかく毎日70食のランチを作っちゃう。一食や二食じゃないということところが、松浦さんのところのスタッフが持つておられる「持続する力」の凄さを感じます。僕も先般、お話ししたランチを戴きに伺いました。シンプルで飽きのこない、ベーシックな良さがある料理で、思わず、食べ物に感謝！という気持ちになりました。

こつした活動を支えているスタッフのことを、もう少し詳しくくつががいたいところなんです、また後でお話しただけ

らと思います。それでは次、土井さんお願いします。

土井 こんにちは。今日のテーマは「コミュニケーションや地域のなかで人々が互いにどう支え合うかということなので、私が日頃の活動や仕事を通じて感じてきたこと、誰かが安心して住めることができる社会」を実現するための3つの種まき、というお話をさせていただきます。

私たちは日々の生活で、便利さをお金で買い、そしてそのお金のために働いて、もっともつと物質的に満たされようとしてきたと思うんです。例えば、それは快適便利生活と言えるかと思いますが、その結果、命の源である水や空気を汚したりとか、あるいは、人と人が助け合つといった、かわりあいのパラメータを失うことになってしまったのではないかと思います。高齢者がこれから全人口の2割に達するという時期に、誰もが安心して自分らしく生きるために何が必要かを、一人一人が自分の問題として考えていくべき時に来ていると思います。

私には、前のおふたりの方のように、これこれのことをしていると言えるようなことは何もありません。今の自分の活動をするきっかけとなったのは、15年程前にフィリピンに行き、彼らが生きているのを見て、自分もこのよな中で仕事したいなと思つたのを覚えています。その後、ひょんなことからカンボジア難民キャンプで活動しまして、そして次にはバングラデシュという国で3年間、援助活動をする事になりました。

帰国後、1990年に神戸の企業で在宅介護家事援助の「

ディネーターとして働き始めました。人の暮らしを支えるということはなかなか難しいことで、その中で日々悩みながら、それでも日本の中の草の根の仕事として誇りを持っていました。この仕事が5年目を迎えたころ、大震災に遭いました。全国あちこちにいる友人、知人からは、私はどんなことがあっても大丈夫な人間だと思われており、自分でもそう思っていました。が、震災は測り知れないダメージを私にあたえました。会社をやめたあと、気力を取り戻すのに時間がかかりました。そうしているうちに、あることに取り組みたいという気持ちが強くなってきました。それが先ほど言いました、誰もがどんな時でもその人らしく生きていける社会を実現していきたいという、ただそれだけのものです。その必要性は、かねがね在宅介護家事援助の現場で強く感じていたものでした。

こないきさつから、その実現にむけて、私は3つの方向からコミュニティ・サポートまたはコミュニティ・アプローチに取り組んでいます。一つ目は個人への直接的な働きかけです。二つ目はコミュニティの再生に取り組む社団法人のメンバーとしての社会働きかけ。三つ目が自分が暮らす町で仲間を募つての地域への働きかけです。このコミュニティ・アプローチというのは私なりに考えますと、自分らしく生きることのできる社会の実現に向けての種まき作業だと思っています。

その作業のひとつが、生活材の直接的な見直しです。消費生活アドバイザーとして、暮らしのなかのさまざま「もの」を再点検してみようという作業です。というのは、暮らしのなかで日頃から安全で安心な生活という問題意識をもち、考え、実

践することが、心豊かに老いて行くために不可欠だと思うからなんです。このアプローチの良い点は、個人が関心をもって日常的な部分に直接働きかけていくことが可能なことです。たとえば、ある地方自治体が企画した消費生活講座のテーマは「整理と収納をとうして大量消費社会を考える」というものでした。自分らしく生きるという大きなテーマがあって、それを日々の生活に結びつけて私がお話するのは、これからはモノを消費するのにお金を使う時代ではない。幸せを心に感じながら生きるためには何にお金を使うべきかをひとりひとりが考える時期に来ている。たとえば、日本の家庭の中で値札がついたまま眠っているもの、使用期限が過ぎてしまったもの、これら忘れられたものを、一軒あたり千円とすると、全国4776万世帯で450億円になります。すごいですね。一軒あたり千円というのは、かなり低く見積もった、仮の数字です。実際にはもっとでしょう。さらに、このストックのほとんどが、最終的には廃棄物になると考えていいでしょう。

世の中の影の仕事の一つに、そうしたものを処分する職業があるのをご存じでしょうか。やがて彼らの手を煩わせることを想像することも、知ることもなく、人はせつせと物を貯め込むことに、お金と時間、エネルギーを使っているんですね。物を所有するよりも、もっとところが豊かになるようなお金の使い方があってはいないか。仮に衝動買いや無駄買いをやめて、そのお金を助け合い組織に寄付するとします。そうすれば、先程のような、捨てるために買い、溜め込む生活、そのために働く生活から解放されるだけでなく、地域の活性化に寄与するは

ずです。それをお金に換算すると、今申し上げたようなことになりません。こつてみると、人と地域の温かくなつながらりを、例えば先程の千円というお金をこつて実感することができないか。一度考えてみませんか。と、いうことを講座で申し上げます。けれども、このアプローチは直接的なメッセージが可能である反面、広がりにくくて、継続的働きかけというのも難しい面があります。

そこで、種まき作業の二つ目です。ある団体の一員としての、コーディネーションの仕事です。この団体は自分らしく生きることのできる社会の実現という理念のもとで、全国規模で取り組んでいて、コミュニティネットワーク協会（CNA）といえます。もともとは在宅での死の看取りに取り組んできた「完成期医療と福祉をすすめる会」が出发点になっています。この団体は神戸で生まれ、今も阪神間を中心に活動していますが、生きて、病気になるて、老いて、やがて死んでいく、人のプロセスのすべてを受け入れられるコミュニティを、人の力でつくっていきたく、ということと、社団法人として登録し、活動を展開しています。

この団体で活動する中で、私はあるケースに出会いました。この団体の参加メンバーはいろいろでして、医師や看護婦、ワーカー、心理職といった人たちがいます。その中の医師からあと2か月くらいといわれている独り暮らしの女性がいるので、一緒にケアをしないかと声をかけられ、訪問しました。部屋は乱雑なままで、その様子からはまだ旅立つための準備はできていないんじゃないか、そんなようなことを感じました。私

はそのときヘルパーとしての役割を果たそうとしていたんですが、最期を看取ってくれる医者や看護婦やヘルパーといった仲間に出会ったことで安心したのか、2週間後の3度目に訪ねたときには、その方は最期の眠りにつかれていました。家は駅から3分くらいの便利なところになりましたが、地域や家族関係から孤立し、病気が進行する中で、たったひとりで5年間過ごしていたようです。この方の場合、私たちCNAとの出会いによって、小さなコミュニティを築き、ひとりきりで死なずにすみました。

今現在の日本には、400万の高齢者世帯があるそうです。高齢者のみの世帯ということば、現在夫婦であっても、やがてひとりの生活になっていくことが当然予測されます。もしかしたら地域に埋もれたまま、たったひとりで最期を迎える人も増えていくのではないかとも思います。CNAでは4年前からホームヘルパー養成講座というものを開いていまして、私はこの講座の運営スタッフをしていまして、全期間を通じて受講生と関ったり、一部教科の講師もしています。この講座は、今の世の中のブームとはちょっとちがいで、職業としてのヘルパー養成ではありません。それよりは、「寄り添っていくこと」の大切さに気づき、地域にもどって助け合いの種となっていく、そんな人たちが増えくくれることのためにを行っています。

先週、今年度の修了式を終えたところでして、今年の講座には地域で助け合う組織を作っておられる方たち、たとえば神戸の須磨区で自治会の出発点となっている助け合い組織「須磨だんらん」や、阪神間での「わくわく神戸」の方々に参加し

ていただき、自分たちのとりくんだ事例、死の看取りのケースですとか、あるいは、妻を震災でなくされて、生きる気力をなくしてしまわれた70代の男性の方への根気よい働きかけ、といった事例を話して戴きました。今の地域の現状を、受講生の方々に伝えたいわけです。40人ぐらいの受講生の方々は、こうした事例を聞くなかで、暮らしを支え、生命の看取りにかかわることは専門家任せではいけない、ということに気づいてくださいます。「看取り」は地域の人みんなで支えていくことが必要なんです、そのことを講座の受講生の生の声として、今年も聞くことができました。

こういふ地域の人材づくりという理念をもった養成講座と平行して、良い意味のアマチュアとして、助け合い組織が互いの持ち味を活かすことを願って、一緒に悩んだり考えたりする中で、ささやかながら私自身のこれまでの経験を提供し、継続的な支援をやつていこうと思つていきます。

3つ目は、先ほど震災に遭つたことを申しましたけれど、震災で神戸市の長田区から宝塚に転居しました。あのときは、皆さんも一日も早く元の生活を取り戻したいと思つたと思つんですけど、私も同じで、家は借りて住んでいたという身軽さもありませんで、まわりよりは早く新しい住まいを見つけることができました。けれど仕事を続けることはやはりできず、結局、会社をやめてしまいました。というのも、これまでに自分がホームヘルパーのコーディネーターとして仕事をしていながら、震災という大惨事のなかでは、自分のことだけしか考えられず、何もしなかつたからなんです。そんな自分を忘れることができない

くて、こころの整理がつかない苦しい時間を過ごし、ちょうど3年も過ぎる頃だつたと思います。兵庫県が地域活動の推進員を募集していることを知りました。今日おいでの方の中にも参加して活動されている方がおられるかもしれませんが、その新聞記事を見た途端、『そうだ、この町でできることやつてみよう、この活動に自分の仕事を生かしたらいいんだ』と思いつきまして、仕事で知り合つた仲間早速声をかけ、参加することになりました。

ところが活動をはじめてみると、つまずくこと、戸惑つことばかりなんです。なぜかといいますと、「これまでの私の仕事は、会社の名刺を通して個々の家庭と繋がつてきたんですけれど、地域のひとりの住民としては何もしてなかつたし、そこにはなんの繋がりもなかつた。活動し始めて、あらためてこのことを知つたわけです。この活動は、つまずきながらも、とにかく自分たちで道をつけていくしかない。そんな私たちの努力は、つまりは「自分らしく生きることのできる地域社会づくり」がテーマなんだと再確認しました。それを「コミュニティ塾と名づけてましてニューズなども発行しております。ただ、これはそのままでは抽象的で捕らえにくいテーマです。「自分らしく生きる」ということを具体化するのに、例えば、子どもとか、先生とか、それぞれの対象を考えまして、そこを入り口にして行事を企画していきます。子どもの場合、先程の梅原さんのお話しにでてきましたプレイパークの活動です。生活体験教室と称しまして、小麦粉を使って食べ物を作つたり、それから家族がふれあつて欲しいということで、ハイキングを企画したりもし

ます。ときには問題意識をもつことも必要だということで勉強会もします。あるときはコミュニケーションをテーマに茶話会を開きました。なぜかといいますと、互いに気持ちの良いコミュニケーションというのはいくらも助け合っていく社会を作る基本だけれど、これが一番難しい、だからやってみよう、というわけです。

それから、助け合い社会という観点から、こんな活動にも手を染めています。それは、現在活動しているある地域が、たまたま高齢化率3%という非常に低い地域なんですね。高齢化社会なんて縁のない所のように見えます。が、あえてこの地域を取りあげたのは、新興住宅地で人口7000人ほど、若い家族が目立ちますが、でもたしかにそこには3%の老人が暮らしているという、その現実があるからです。若い家族が目につくということは、年寄りたちの存在が見えにくい、ということになります。この老人たちの存在を認識し、自分自身の老いを考え直すために、高齢者疑似体験というのをやってみることにしました。丁度明日がその行事の日でして、地域の公園で、プレイパークともつながっていますが、

私たちのグループがこの高齢者疑似体験をやってみようということになったのは、老いていく家庭、暮らしの中の不自由とはどうなることなのか、また年代間のギャップ、理解の足りなさ、そういったものを考える機会を作って、そのことを一人一人が自分のペースで、自分のことに引き付けて考える現実的・具体的な機会を作り出したいと思ったからなんです。

ただ、行動を起こそうとすると、次々と問題が起きてきて、

実は正直なところ投げ出したい思いが断続的に襲ってくるんです。本当に難儀な種まきで、これは自分との戦いのようなものだと、いつも思われます。先ほど松浦さんがあまり考えないで立ち上がる、とおっしゃったんですが、私も新聞広告をみて、『そつだ』と思ってたちあがったんですが、しょっちゅう後悔しています。後悔しながら前に進んでいます。

こんなふうに、私が3つの種まきに取り組むのは大きな理由があります。コミュニケーションを作り、また、地域で支え合う、そういう社会を作るには、私たちがもう一度取り戻さなければならぬものがあるんじゃないか。そう、思うからです。最初に申しました、どんどん快適便利生活を追求し、ここ30年程の間に、私たちは家電品をどんどん導入してきましたよね。外に出かけるのに自家用車を使う方も多いですよね。私も車を運転します。車は個室だからいい、と車好きの方はよくおっしゃいます。あるいは、電車の場合、効率がいいということで自動券売機と自動改札になっています。家に帰れば個室。スピーディーでわずらわしさのない生活です。こうした生活で、私たちはいつのまにか、人と人とのかわり合いのバランス感覚をなくしているんじゃないか、そう思います。ここところが一番大事なんだなと、活動しているうちに気づいてきたんです。

私はパングラデッシュで3年間生活したと申しましたが、そこは北海道の2倍程の国土に1億人以上の人が暮らしているんですね。ところが、まったく息苦しさがなくって、ホッとできるというか……。私はそこで、毎日、『ああ、私は生きているな』という実感を感じながら暮らすことができました。パングラで

は自動券売機や自動改札などはなくて、駅で70秒立っていれば70人の人に囲まれます。そして、彼らは必ず何かしら、言葉をかけてくるんです。『ちょっとよけてよ、私が行くんだから』とか『どこから来たんだ』とか、質問攻めに会うんです。そういうふうには、彼らは瞬時に人間同士のかわりあいを築いている、人間同士のかわりあいのバランス感覚、ちょっとおせっかいだったりもするんですが、それでもどこかでふと笑えるようなバランス感覚を持っているようなんです。このかわりあいの交わる感じ、これが、『ああ、生きているな』と感じるところなんです。

私自身が子どもだったころ、今から30、40年前のことですけれども、日本にもそういう自然なコミュニティはあったなと思うんです。この阪神間では、震災で人と人とのかわりあいがとても活発になった、といわれています。確かに、人に手を貸すというに関心を持った人は多くなったと思います。けれども、実際のところ、人の手をかりるのは少しばかり気兼ねがあると思いませんか。また、手を差し出す方も無意識のうちに優越意識といえますか、ちょっと優位に立ったような感覚といえますか、そういうものも働くのではないかと思います。

じつを言うと、それまで自分が人に手を差し出すことを仕事にしていながら、震災の時に、私自身が人の助けを素直に受け取れませんでした。また、色々辛いことがあっても、「助けて」と言えないんですよね。仕事の中で出会っているようなケースでも、先程の5年間、ひとりで暮らしていた人もそうですけれど、お年寄りや病気になる方というのはなかなか助けて

ていうサインを発信できないんです。また、差し出されたヘルプの手を断る人もいます。そういう人たちの気持ちは自分の体験からもわかる気がします。そういうお互いのやりにくさというか、バランス感覚の取りにくさというものを、小さなお金によつて気楽にできるようにしようという考え方もできています。

が、私はもっと日常的に助け合いを交換していくこと、人の手を借りるトレーニングをやっていくのがいいと思っています。お金に頼らず、助け合いをしていくことも大切ではないでしょうか。例えば、私たちは日常的に草引きなんかのように、ちょっと人の手が欲しいなと思うことがありますよね。窓のガラス拭きなんかも、もうひとりが裏からすると早いですよね。そういう時に誰か手伝ってくれる人いませんか、と声をかけられるような、人とのかわりあいのネットワークが身近にあれば、お金を介在させずにお互いに助け合い、それに慣れていくことができるのではないかと思います。

先程、松浦さんのお話のなかで、アメリカは万善合理的で病院だとお金がかかるから地域で、というものがありました。お金を介在させない助け合いの日常的な交換システムは、合理主義の国、快適便利生活の先進国であるアメリカで既に始まっています。ある統計によると、3千以上のグループがそうした活動に取り組んでいて、行政や社会保障システムなども取り込んで、世の中の一部になっているようです。日本でも、瀬戸内海にある、小さな島で一年程前から取り組まれているそうです。その島では山の上に住むお年寄りの買い物も、山の下にいる人

が代行するそうです。そしてそれを届けた時に、山の上に住むお年寄りが作ったお惣菜なんかをもらってくるんだそうです。これを村ぐるみでやる。既にそういう動きも出てきているんですけども、こういう日常的な助け合いの交換システムが、日本中のどの地域でも起きていったらいいと思います。そうするのが当たり前になったときに、私たちは少し前までもっていた、人と人とのバランス感覚を取り戻して、新しい時代のかかりあいを作っていくことができるんじゃないかと思います。安心して誰もが自分らしく生きることのできる社会の基本に必要なのは、あつたかい助け合いのあるコミュニケーションだと思えます。

前のお二人の言葉にもありましたが、そう思うからこそ、人とかかわるのは本当に厄介だなと、ときどき思いながらも、種をまき続けていきたいと思っています。私は、たまたま住んだ関西で、私自身がこぼれ種となってこれからも人とかかわっていきけるんじゃないか、またそのことを幸せだと思っています。地域の中で、どう支えるかということ、私の3つの取り組みからお話しさせていただきました。あげがとうございました。

羽下 どうもありがとうございます。それでは、最初梅原さんからお話しただいてからだいぶ時間がたっていますので、他の2人の方のお話しをお聞きになっていて、追加して発言をされたことがありますら、最大限3・4分くらいでしていただければと思いますが、いかがでしょうか。

梅原 お二人のお話しを聞かせていただいて、やっぱり子育てと

ベースは一緒なんだなという気がしました。私自身は貝塚で子育てネットワークサークルをつくり、そこで子育てにかかわっているんですが、それは私自身の子育てであって、べつにそれは他の誰かに強制するものではないかと思っていました。でも最近インターネット関西とか貝塚で若いお母さんに出会って行く中で、今彼らに一番必要なのは人間関係をつくっていくことだな、と思うようになってきました。普段はまったく普通のお母さんたちなんですが、人との関係を作ることがどうも下手になってきているようです。ちょっとしたことですごく傷つくデリケートなところがあって、自分と違う意見を言われると、それだけで自分を全面的に否定されたように感じてしまうようなんです。そんなふうにくすぐり傷つき易いという半面、すくくひどい言葉を人に投げつけることもあって、両面を持っているんですね。土井さんが言われた「バランス」が取れない状態なんです。

サークルなどの中で、もう一度人間関係を作るトレーニングをしていく必要を感じます。サークルをつくらないと子育てができないわけではないんですが、一人で子育てするのではなく、それこそ近所同士、複数で自分たちの子どもを育てるならかの形ができたらいいなと思います。

もう一つは、たぶん私たちの世代は、母親として一生懸命愛情をそそいで子どもを育てていけば、子どもは普通の子になっただけという安心感があったと思うんですね。が今は、そうやって良い子育てをしていけば良い子どもになる、という公

式が全く通用しなくなってきました。いろんな少年事件などの弁護士さんのお話しをきかせていただいても、お家は放任でもなく、過保護でもなく、普通のお家で、お父さんが厳しすぎるとかお母さんが甘やかし過ぎるとかもなく、普通に一生懸命子育てされている方の子ともさんがちよっと足を踏みはずす。例えば非行に走るとか不登校になってしまつとか、どうしてあのお家のお子さんが、というところがあるんですね。それを見てみると、今の時代には、こういう子育てをしたらこんな子になる、という公式は存在しないんだと思いました。子育ての途中で何か起こつて躓くというのは、あつて当然で、なかつたら儲けもの、というぐらいのもりじゃないと、やっていけないんじゃないか。そう、感じます。

そして、うまく行かない時にひとり抱え込んでド口沼にはまってしまう、問題がさらに大きくなってしまう。つまりいたときに支える仲間がいて、そこから抜け出す力をつける。孤立した親子関係の中だけにいると、それは無理なものではないか。子どもたちもいろんな遊びの中で切磋琢磨し、ときにはひどい言葉を投げつけられたり、そういういろんな体験をつんでいくことが必要なのではないかと思えます。

今日の資料にも乗せさせていただいたのですが、つまづいた時に立ち上げられる力をつけていくということ、支え合える人間関係を作っていくということが、今の子育てに必要なのではないかと思えます。はやくからいろんなこと詰め込んで、中学くらいになってから3歳ぐらいの子が起すようなことやってるのが、今の子どもに見えてきている現象かなと思えます。

以上です。

羽下 ありがとうございます。一言つけ加えますと、僕は今每週、中学校にスクールカウンセラーとして行つてるのですが、子どもたちって、互いにすごく敏感で、とても気を使つていんですよね。見ていて、気の毒なぐらいです。人に慣れてないというか。そこでは、互いのやりとりのなかで自分が非難をされていると感じたとき、一気に反撃に転じて、そこに何かとんでもないものが飛び出すんじゃないか、と思つてことがあります。その意味では、お互い打たれ慣れてないという面もあるかなと思つてます。敏感すぎない、気を使い過ぎないための練習問題が、お互いに必要な気がします。

都市に暮らす場合、個人が孤立し無防備な状態に置かれやすく、他者からの偶発的な（それゆえ予測不能な）刺激に曝されることから身を守るつとして、過剰な配慮と相手への気づかい、つまり敏感さを身につけることになる。逆にそれが無効と感じた時には、それまで繰り返し理不尽な目に遭つたことへの反撃として、本人も予想もしなかつた暴力性の誘発が起き得る。彼らはそんな際といバランスの上に日常生活しているのでは想像します。『傷つけ易さ』と『傷つけられ易さ』。それが通常『傷つき易さ』と言われるものの、対人関係の中での現れ方がな、と思つています。松浦さんこのあたりも含めて、少し追加発言をお願いします。

松浦 さつき申しました、こころ病むということが特別な人の特

別なこと、自分とはかけはなれたことではなくて、人生の途中でいつだって私たちに起こるかなという気がするんですね。やはり限界までやったんだけれど、もうできないのかなと思ったり、今おっしゃったような人間関係に傷ついたり疲れてしまったり、ちよっとゆっくり休みたいとか、充電したいとか、ゆっくり話を聞いてほしいという時が誰でもあるわけです。そんな時に十分休めたり、今のあなたでいいんだよと、話を聞いてくれたりするところがあればいいなと思っています。

今の梅原さんのお話しともつながるんですが、私たちのクックキングハウスでは、お互いところが傷ついた人たちがたくさんいらっしやるんですね。しかも子ども時代にころころが傷つくというのは、結構長く尾をひいて、解決するまでのかなりの年数を要します。ですから、今のお話しにあったようなネットワーキングがたくさんあつたらどんなによかつたらと思う人たちが大人になって、そんな人たちを私たちは引き受けているんですね。

ある一人の方のお話しをいたしますと、彼女は今35歳になっていますが、高校に入った15歳の頃に不登校になるんですね。それまでは良い塾、良い学校に行きことが良いことだといふ、その家のモデルのようなものがありました。それでいいんだと彼女も思って、進学塾に通い、よい学校に通っていたんです。けれど、高校に入った時に、人間関係がすごく苦しくなつて、授業で先生が話しているのを聞いているだけなら楽なんですけれど、休み時間になるとどうやって人間関係をつくっていくかすごく苦しくなつちやうって、パニックになるんですね。

そして学校を休むんようになるんですが、その時に自分は期

待されていた良い子の座から降りてしまったということに自分自身がすごい衝撃を受けて、二次的な症状として、いろんな精神的なものがでてきてしまつたんです。その症状を見て、親の方も本当の原因がなんなのか見極めることができなくて、慌てふためき、結局彼女は大人の精神科の病院に入れられてしまつたんですね。そして鍵をかけられた時に、「入れないでください！」って叫んだんですけど、聞いてもらえなくて、この時、自分の人生は終わってしまったと感じたそつです。それが15の春です。

それから家に戻ってからも、こんな風にしてしまった親への怒りと、自分が生きていく中での人間関係をどうにもできない、エネルギーが出てこないという両方の腹ただしさがあつて、ものすごい家庭内暴力をやりつづけるんですね。親のほうもますます混乱して、とにかく世間体が悪いから、娘がガラスを叩こうとすると抑えついたり、椅子を投げるときにはその音が漏れないように気をつけるとか、そんなことが繰り返されます。とにかく彼女の機嫌を損ねないように両親は一生懸命気を使い、おどおどしながら数年が過ぎます。あるきっかけでクッキングハウスでの出会いが始まり、そこで彼女が体験するのは、もう一度子ども時代の自分の心が受け止められ、自分を育て直すというものなんです。年数をかけて、そこを私たちが毎日付き合ひ続けています。

子ども時代の豊かな人間関係の中で、大人や上の子どもたちともかわりながら育つて行くことができたらどんなにいいか、そつしたら私自身もこんなに大変で忙しくなかつたんだろ

うなと思いが、お話を伺っていました。子ども時代の傷つきをずっと背負って来た人にとつて、その経験はものすごく重たいんですね。ですから今日のお話しの「ネットワーク」というのはすごく大事だなと思って、今日は神戸に来て良かったなあと思いました。

羽下 ありがとうございます。では土居さん、追加がありましたら、どうぞ。

土井 今おふたりのおっしゃったことと多少繋がるかと思いますが、私自身も先程の経験からいえば、こころを病むというのは日常の中にあるんだなと思うところから、この震災後の活動も出発しています。子どもが育っていくためには、大人と子どもが、そして大人同士が互いにコミュニケーションや地域社会と繋がっていることが必要です。

皆さんも存じかもしれませんが、小学校に通う途中で何人かの子どもたちが集まって一人暮らしのお年寄りをずっとみていくという活動がありまして、そこで最初は独り暮らしのお年寄りってどんなんだろうっていう興味半分で見っていたのが、その人とどんどん仲良くなっていって、最後に返事もしない年寄りがいつともはまったく違つ様子になっていく、それを子どもも大人たちも発見するんですね。その話しを聞いて思つのは、世代の違つ人たちを見守っていくことが大切なんだな、ということ。特に、子どもは死という現実を学んで、自分で生きてくエネルギーというか、優しさのよつなものを取り戻してい

く機会を得るのではないかと思います。

私の場合で申しますと、「すみれコミュニケーション塾」の活動では、その地区の小学校には千人の小学生が通う大規模校があるんですが、その子たちに何か世代間の違いを実感できる遊びを提供できなかったらなあと思って、先程の小麦粉を使って生活体験教室を試んでいます。そこでは、大人の私たちはちょっと引いて、大学生ぐらいのリーダーさんについてももらいます。そして、何かを教えるのではなく、一緒にひとつのものを作り上げるということをやっています。

老いの問題は、かならずしも高齢者という問題に絞つて考える必要はないと思うんです。お二人の活動を伺っていて、これはもう一緒に取り組んでいく問題だと思いました。死というのは現実に誰にでも訪れるもので、これほど世の中に確かな現実はないと思うんですけど、皆さん、見事に目にみえないところに追いやつてしまつ。そうではなく、人が生ききつていくなかから新たにエネルギーをもらつて、やさしさを取り戻していくような関係ができていつたら良いなと思います。そのために日常できる些細なことを交換し合つていくようなことができていつたらいいなと思います。

羽下 ありがとうございます。三人のお話しをうかがつていて思つたんですが、それぞれがかかわる『世話したり・されたたり』の活動で、自分が直接手を出すのではなく、つまり出張つて行かないで、ワン・クッション置いて、間接的に仕事をしておられる。自分が手を出したほうが早いのに、と三者三様におし

やっていますよね。しかし、そこで人の仕事を取らないで、その人にふさわしい仕事と能力の發揮の仕方が、潜在的にはその人の中にあるんだとわかるころから、こういう仕事が始まるのだから気がします。

一方、そう思うことで、彼らをバックアップする時に、自分が直接するのは全然違う厄介さが発生しますよね。土居さんも「投げ出したい」とおっしゃったけれど、そこを踏ん張る決心を、これまた三者二様に持つておられるのだらうなと思いいながら、お話を伺っていました。

個人的な感想が三つありまして、ひとつは他人から『世話され慣れる』、あるいは『世話し慣れる』こと、われわれにはそういう練習問題がお互い足りなかったんだらうなということですね。あまり勝手に世話してもいけないけれど、いざ、人に世話を任さないといけない時に、世話され慣れてない。それが互いに自然にできるようになること。このこなれた関係がやり取りできるようになると、われわれも随分と互いの関係を取り易くなり、その分、互いに住み易くなるのではないのでしょうか。

もうひとつは今回は本題にならなかつたのですが、悪意のテーマです。善意だけを紡いでいくというのではなくて、人が悪意をばらまくということも十分カバーできるかどうか、という問題も大きいような気がします。悪意というのは、この世の中にそのまま出してはいけないもの、出したら破壊的になるもの、それがコミュニケーション活動や地域での活動の中にあちこち登場するわけですから、われわれの活動の『世話する・される』がそれをカバーしうるものになるかどうかと、というテーマで

す。

三番目は、人が生きている現実のなかに登場するテーマ、子育て、老いること、障害を持つことが、時代や文化のバイアスのなかで、必要以上に重くされ、強調されてしまうところを、積極的に軽くしていくそれぞれの練習問題と考えてはどうだろうか、またそのためには、専門家のみの『治療』や『ケア』ではなく、また、アマチュアの善意だけでもない、専門家とアマチュアの柔軟で、しかもしっかりした組み合わせによって、初めて実現できるものではないか、と思うのです。三人の方それぞれに、そのことを間接ながら語って戴いているのだと思いつつ、うかがっていました。幾分時間がありますので、最後に一言つつ、感想などありましたら、どうぞ。

梅原 心の子育てインターネット関西というのは、会員組織になっています。まだただかだか600人程の会員しかいませんが、その方たちで運営しておりますので、今日ここにおいでの方で、会員になりたいとおっしゃる方は連絡先がホームページにありますので、どうぞご参加下さい。私たちとともに学んでいただけたらなあと思います。来年1月30日に全国のネットワークの交流集会を開く予定でして、御案内のチラシもそこに入れてますけれど、今全国各地でネットワークが立ち上げられ、今回の参加グループは、目下約40ぐらい、エントリーされています。北海道や九州、徳島・鳥取、関西圏からも参加することになっております。関心のあるかたはこれにもご参加下さい。以上です。

羽下 ありがとうございます。では、松浦さん。

松浦 このころの問題は大切なんだっていうことを、いまみんなが考える絶好のチャンス、そういう時期に来てるんだと思うんですけどね。神戸の震災でもそうですが、高度経済成長もストップしたし、いろんな問題がたくさんあるなかで、学校も崩壊しかけているというし、ほんとうに今やっとこのころをゆっくり見直せる時代になったなあと思って、これからこのころの問題の大切さをみなさんと一緒に語り合って行けたらなあと思います。

羽下 ありがとうございます。では土居さん、一言。

土井 日常的な助け合いのシステムのことなんですけれど、例えばどのように展開して行くかといいますと、三人の人が集まって、わたしは料理が得意なのでします、わたしは庭仕事が好きです、わたしは子どもとかかわるのが好きですという、三人の人がいるとします。そういうひとたちが少ない人数が集まると、お互いのできることを互いに出していきます。それをお互いに取り替えていくんです。交換することができなければ新たな仲間を増やしていく。そういうことを日常的に意識的にやっていくことが必要だと思います。これは最初のところからかきお金がかかりません。大きくなって事務所を借りたりすると経費がかかりますけれど、わたしが部屋を貸そうという方がでてくるとお金はいらなくなります。お金をかけずに日常的に目の

前にあることをどんどん交換して、最後は大きな支えあいのシステムができていく。本当は今からでも皆さんに私のできるものというリストを出し合って、そういうたつなかりを作っていくたらいいのなと思っています。

羽下 いや、困りましたね。他人の話を聞いている場合じゃないんだが、明日から何かしないとけないような感じですね。

こういう場合の基準線のようなものを、今、強引に二つほど考えました。一つは「ボランティアだから……」お金をもらってないから……、という言い訳なしでやっていけるかどうか。一番目はその逆で、「お金払ってるじゃないか!」とイヤモンをつけないでやっていけるかどうか。「ちゃんとやれよ、お金払ってるじゃないか!」。つまり、われわれのコミュニティ活動全体を、専門家と非専門家の組み合わせという点から見直し、組み立て直すことで、先程の言い訳とイヤモンを言わなくて済むようになる、これが、こうした活動が越えるべき大きなハードルかなと、そう考えながらお話を伺っていました。

時間が参りました。これで終わりにしたいと思います。長時間に亘るシンポジウムでしたが、皆様、ご静聴ありがとうございました。

* このシンポジウムは、1999年11月13日、開かれたもので、企画者である羽下が、当日話された内容・雰囲気や極力残しつつ、最小限の修正をして、読み下しやすい形に整えたものである。したがって、文の責任は羽下にある。